

インドネシアバンダアチェにおいて、減災ポケット「結」プロジェクト出前授業を実施しました (2016/11/21)

テーマ：減災意識啓発

場所：SD Lambaro Neujid (Aceh Besar District) SD Beurawee (Banda Aceh city)

2016年11月21日(月)に、2004年インド洋地震津波の震源地に最も近く、大津波によって甚大な被害があったインドネシアのバンダアチェ地方の2つの小学校で、当研究所の今村文彦所長、サッパシーアナワット准教授、保田真理助手（いずれも災害リスク研究部門）が結プロジェクト減災意識啓発出前授業を実施しました。SD Lambaro Neujid 小学校はスマトラ島の北端に位置する津波浸水区域に位置し、2004年当時は村の住民の8割が津波の犠牲になっています。

出前授業には、3年生から6年生まで50名の児童が参加しました。震災後12年が経って、児童には実体験が無く津波への警戒心も薄れていますが、11月5日に世界津波の日の記念イベントとして避難訓練が行われていたため、児童も教師も津波への関心が高まっていたタイミングでした。自然災害を科学として伝えたレクチャーに続き、グループワークはスタンプラリーを実施しました。児童は初めてのスタンプラリーにとっても興味を持ち、積極的に参加していました。ムラボーでは、自助を示す赤いスタンプを押した児童が多く見られました。バンダアチェの中心部にあるSD Beurawee 小学校では6年生60人が参加しました。彼らの居住地域は2004年当時津波の影響を受けていませんが、高学年の児童の津波への関心が高いのが印象的でした。スタンプラリーでは共助を示す緑色のスタンプを押した児童が多く見られました。

今回は以前から関係が深いシャクアラ大学のムザイリン教授と学生がインドネシア語の通訳として参加してくれました。インドネシアでも児童への減災意識啓発教育が注目されていて、「結」プロジェクトの教育手法に高い関心が寄せられました。日本とインドネシアはともに島国で、同じような自然環境にあり、自然災害も多様で多発国であるという共通点があります。今後も津波への減災意識啓発教育において、お互いに情報を交換し協力し合う関係を気づいていくことを確認できた良い機会となりました。



授業の様子



集合写真



スタンプラリーの様子



スタンプラリー後のディスカッション